

気になるひと言

橋本大二郎

鳩山政権が発足して、1か月余りたった昨年10月、鳩山総理とルース駐日アメリカ大使が同席するパーティーがあった。同じスタンフォード大学の出身者として、ルース大使との蜜月をアピールした総理だが、早くも、かなりの気疲れを感じ取れた。

その会でのこと、幼なじみの総理に、「あまり無理をしないように」とねぎらいの声をかけると、「無理なんか出来ないもんね」という答えが返ってきた。それ以来、この言葉がずっと耳に残っている。

今振り返れば、一番勢いがあったのは事業仕分けの時だった。これまで、国民の目には見えにくかった税金の使い道が、明らかにされた功績は大きい。業界団体と族議員が官僚ともたれあってきた、従来の自民党政権には出来ないことだったから、多くの国民は拍手喝采をした。

ところが、事業仕分けには、その結果を次の展開につなげる戦略がなかった。そのため、廃止・削減を申し渡された団体は、民主党幹部のもとに、陳情に訪れることになった。これでは、参議院選挙に向けて、自民党の支持団体を寝返らすための、パフォーマンスにも見えて、せつかくの事業仕分けを卑しめることになる。

なぜ、総理として、事業仕分けの結果を活かす、戦略を打ち出せなかったのか。党との関係で、無理が出来なかったのだろうか。普天間の問題にも、国としての戦略が感じられない。総理は、「アメリカとの約束」と「沖縄県民の思い」、それに「社民党への配慮」という三元連立方程式を、解こうとしているように見える。しかし、この計算式の立て方は間違っている。

この問題では、この国の守りをどうするかという、「答」が先になければいけない。日本の置かれた地政学的な位置からみて、自前の軍備を敷くなら別だが、そうでない限り、有効な守りを構えなくてはならない。

フィリピンの、クラーク空軍基地、スービック海軍基地から、アメリカ軍が撤退した結果、中国の印度洋への進出が際立っている。決して、中国を敵視するものではない。逆に、中国との未来にわたる友好を確かなものにするためにも、無用な摩擦を避けるための守りの手だてが必要だ。

政権交代があってもなくても、わが国にとって、沖縄が持つ地政学的な意味は変わらない。総理は、そのことが分かっているからこそ、オバマ大統領に、「トラスト・ミー」と言ったのではなかったか。

日本の将来に関わる「答」を、国民に示さないまま、目先のX、Y、Zを解こうとしても、結果は計算間違いに終わるだろう。ここにも、社民党との関係など、無理の出来ない事情が作用していないか。

年頭の会見で総理は、今年を正念場と呼んだ。政権発足後100日の、国民との蜜月を終えて、すぐ正念場は早すぎると思ったが、今こそが、「無理をする正念場」だと考えているのなら正解だ。

寅年とはいえ、勇猛な虎ばかりとは限らない。張り子の虎もある。「無理なんか出来ない」といった、仲間内との蜜月を終えて、総理は無理をする気迫を持てるだろうか。